

走れメロス

太宰治

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた。きよう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやつて來た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律気な一牧人を、日々、花婿として迎える事になつてゐた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買ひに、はるばる市にやつて來たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティイウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思つた。ひとつそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜の

せいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて來た。路で逢つた若い衆をつかまえて、何かあつたのか、二年まえに此の市に來たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答えなかつた。しばらく歩いて老爺に逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老爺は答えなかつた。メロスは両手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。老爺は、あたりをはばかる低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございません。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架

にかけられて、殺されます。きょうは、六人殺されました。

んでいるのだが。

聞いて、メロスは激怒した。「呆れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、単純な男であった。買い物を、背負つたままで、のそのそ王城にはいって行つた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懷中からは短剣が出て來たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであつたか。言え!」暴君デイオニスは静かに、けれども威厳を以て問いつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かつた。

「市を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか?」王は、憫笑した。「仕方の無いやつじや。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」

「言うな!」とメロスは、いきり立つて反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき惡徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑つて居られる。」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて呟き、ほつと溜息をついた。「わしだつて、平和を望

なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」「んどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

「だまれ、下賤の者。」王は、さつと顔を擧げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

「ああ、王は俐巧だ。自惚れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、

――」と言いかけて、メロスは足もとに視線を落し瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つて来ます。」

「ばかな。」と暴君は、嗄れた声で低く笑つた。「どんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰つて来るというのか。」

「そうです。帰つて来るのです。」メロスは必死で言い張つた。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待つてゐるのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人を絞め殺して下

さい。たのむ、そうして下さい。」

それを聞いて王は、残虐な気持で、そつと北叟笑んだ。

生意氣なことを言うわい。どうせ帰つて来ないにきまつて
いる。この嘘つきに騙された振りして、放してやるもの面
白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるもの気
味がいい。人は、これから信じられぬと、わしは悲しい
顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中
の、正直者とかいう奴輩にうんと見せつけてやりたいもの
さ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には
日没までに帰つて來い。おくれたら、その身代りを、きっ
と殺すぞ。ちよとおくれて來るがいい。おまえの罪は、
永遠にゆるしてやろうぞ。」

「なに、何をおつしやる。」

「はは。いのちが大事だつたら、おくれて來い。おまえの
心は、わかつているぞ。」

メロスは口惜しく、地団駄踏んだ。ものも言いたくなく
なつた。

竹馬の友、セリヌンティイウスは、深夜、王城に召された。
暴君ディオニスの面前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで
相逢つた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌン
ティイウスは無言で首肯き、メロスをひしと抱きしめた。友
と友の間は、それでよかつた。セリヌンティイウスは、縄打

たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星であ
る。

メロスはその夜、一睡もせずに十里の路を急ぎに急いで、
村へ到着したのは、翌日の午前、陽は既に高く昇つて、
村人たちは野に出て仕事をはじめた。メロスの十六の
妹も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめい
て歩いて来る兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。そう
して、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」メロスは無理に笑おうと努めた。「市に
用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あ
ず、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。」
妹は頬をあからめた。

「うれしいか。綺麗な衣裳も買つて來た。さあ、これから
行つて、村の人たちに知らせて來い。結婚式は、あすだと。」
メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰つて神々
の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、
呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の
家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明
日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけな
い、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節
まで待つてくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、
どうか明日にしてくれ給え、と更に押してたのんだ。婿の

牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぱつりぱつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となつた。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引ききて、狭い家中で、むんむん蒸し暑いのも悦え、陽気に歌をうたい、手を拍つた。メロスも、満面に喜色を湛え、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにいたい、と思つた。

この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになつていよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまつていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。今宵果然、歓喜に酔つているらしい花嫁に近寄り、「おめでとう。私は疲れてしまつたから、ちよつとご免こもうむつて眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。

大切な用事があるのだ。私がいなくとも、もうおまえには優しい亭主があるのでから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから嘘をつく事だ。おまえも、それは、知つてゐるね。亭主との間に、どんな秘密でも作つてはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持つていろ。」

花嫁は、夢見心地で首肯いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、

「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になつたことを誇つてくれ。」

花婿は揉み手して、てれていた。メロスは笑つて村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠つた。

眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きょうは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑つて磔の台に上つてやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振つて、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ちどまりそうになつた。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走つた。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて来た。メロスは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きっと佳い夫婦になるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆっくり歩こう、と持ちまえの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降つて湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまつた。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪に渾されて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようになつてゐる。メロスは川岸にうずくまり、男泣

きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。「ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流れを！」時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

潮流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、そうして時は、一刻一刻と消えて行く。今はメロスも覺悟した。泳ぎ切れりより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！ 潮流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ発揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのたうち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと搖きわけ搔きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の姿には、神も哀れと思つたか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつゝも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のよう大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、まだには出来ない。陽は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切つて、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他には何も無い。その、たつた一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取つて、

「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さつさと走つて峠を下つた。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と氣を取り直しては、よろよろ二、三歩あるいて、ついに、がくりと膝を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋馱天、ここまで突破して来たメロスよ。眞の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、稀代の不信の人間、

まさしく王の思う壺だぞ、と自分を叱つてみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。路傍の草原に、「ころりと寝ころがつた。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰つた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かつた。神も照覧私は精一ぱいに努めて來たのだ。動けなくなるまで走つて來たのだ。私は不信の徒では無い。ああ、できる事なら私の胸を截ち割つて、真紅の心臓をお目に掛けたい。愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺いた。中途で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定つた運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本当に佳い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互の胸に宿したものとは無かつた。いまだつて、君は私を無心に待つているだろう。ああ、待つてゐるだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君

を欺くつもりは、みじんも無かつた。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給うな。放つて置いてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑つてくれ。王は私に、ちょっとおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言うままになつている。私は、おくれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を放免するだろう。そうなら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なしてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがい無い。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。ああ、何かも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまつた。

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上つて、見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出しているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬つて、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労恢復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待つてい人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれる人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその事だ。走れ！ メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは勇者だ。再び立つて走れるようになつたではないか。ありがたい！ 私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待つてくれ、ゼウスよ。私は生

れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行く人を押しのけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。

一団の旅人と顔つとすれちがつた瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も磔にかかるつているよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走つているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であつた。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風と共に聞えた。
「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでござります。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でござります。むだでござります。走るのは、やめて下さい。もう、の方をお助けになることは出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちようど今、の方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かつたなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた。走るより他は無い。「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。の方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平氣でいました。王様が、さんざんの方をからかつても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちつづけている様子でございました。」「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののが、為に走っているのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」「ああ、あなたは気が狂つたか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走つた。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に

突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰つて来た。

約束のとおり、いま、帰つて来た。」と大声で刑場の群衆に

むかつて叫んだつもりであつたが、喉がつぶれて嗄れた声

が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気

がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれ

たセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロ

スはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように

群衆を搔きわけ、搔きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人

質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精一ぱい

に叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友

の両足に、齧りついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。

ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほ

どかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言つた。「私

を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度悪

い夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら、私は君

と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。殴つてから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じく高い音高く私の頬を殴れ。私

はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生

れてはじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、

私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つ

た。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、

それから嬉しく泣きにおいおい声を放つて泣いた。

群衆の中からも、歎歎の声が聞えた。暴君ディオニスは、

群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめていたが、

やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言つた。

「おまえらの望みは叶つたぞ。おまえらは、わしの心に勝

つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。ど

うか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの

願いを聞き入れて、おまえらの仲間に一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歎声が起つた。

「万歳、王様万歳。」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロス

は、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやつた。

「メロス、君は、まっぽだかじやないか。早くそのマント

を着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆

に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。